

1. サルメンエビネ

エビネの仲間（エビネ属）はアジア中南部からマレーシア、オーストラリア北部、オセアニアの島々、アフリカ南東部、中米に約 100 種類が分布しています。これらは地際にサトイモ状の球根（偽鱗茎^{ぎりんけい}）がいくつも連なっており、これがエビの姿に似ていることから「海老根（蝦根）」という名前が付けられました。

エビネ属は日本には 19 種類ほどが自生しており、その中でもひととき大きく目立つ花を咲かせるのがサルメンエビネ *Calanthe tricarinata* です。花の中央の花びら（唇弁^{しんべん}）は赤味を帯び、皺^{しわ}や隆起があって猿の顔のようだということから「猿面」エビネと呼ばれます。また動物の猿ではなく、能面の一つ「猿面」に基づくという説もあります。

主に山地の林床に自生し、北海道では 5 月から 6 月にかけて開花します。花茎は他のエビネの仲間 비해太くてしっかりしており、高さ 30~50 cm にも伸び、まばらに数~十数花を付けます。草丈もエビネの仲間では大型であり、葉は 3~4 枚ではっきりとした縦皺があり、長楕円形で長さ約 30 cm にもなります。エビネの仲間ではもっとも北方まで分布する種の一つで、寒い地方では群生しやすく、暖かい地方では一個体ずつ点在する傾向があると言われます。

日本以外にもヒマラヤから中国南部、台湾にかけて分布しますが、これらをすべて同一種とする見解に対し、産地により三つの変種に分けられるとする考え方もあります。

エビネの仲間の栽培は室町時代から鑑賞用におこなわれていましたが、サルメンエビネが広く栽培されるようになったのはそう古くありません。暑さに弱いため本州平野部では簡単に栽培できるものではなかったようです。しかし戦後、エビネと自然交配した雑種が発見され、耐暑性に優れていたこともあって広く栽培されるようになりました。現在では多数の人工交配種が生み出され人々の目を楽しませています。

サルメンエビネは本園では高山植物園の橋の東側で見ることが出来ます。



サルメンエビネ (*Calanthe tricarinata*)

2. アツモリソウ

アツモリソウの仲間（アツモリソウ属）は北半球の温帯に約 30 種が分布しています。ラン科植物の花は 3 枚の萼片と 3 枚の花弁から成るのがふつうですがアツモリソウ属は 2 枚の萼片が癒合ゆごうしており、結果的に 2 枚の萼片がくへんと 3 枚の花弁で花を形作ります。3 枚の花弁のうち下側に着く花弁を唇弁しんべんと呼び、この唇弁が袋状になっているのがアツモリソウ属の大きな特徴です。イギリスでは「貴婦人のスリッパ」、アメリカでは「モカシンフラワー」、フランスでは「ビーナスの木靴」などと呼ばれています。スリッパ、モカシン、木靴はいずれも浅い平底の靴で、アツモリソウの唇弁の形を表現したものです。この唇弁はしばしば思いがけぬ使われ方をされることがあります。チベットの近くでは袋状の唇弁に穀物の粉を入れ、焼いて食べるそうです。また日本では、唇弁に空気を吹き入れて鳴らして遊ぶ習慣があったと柳田国男の「遠野物語」に記されています。

アツモリソウ属は日本に約 5 種が自生しています。一般にアツモリソウと呼ばれるのは *Cypripedium macranthum* で、中部地方より北に分布しています。草丈は 25~40 cm です。山地の草原に自生し、春から初夏にかけて紅紫色の花を一つ咲かせます。アツモリソウの変種にはアツモリソウより大きな花を付けるホテイアツモリソウ

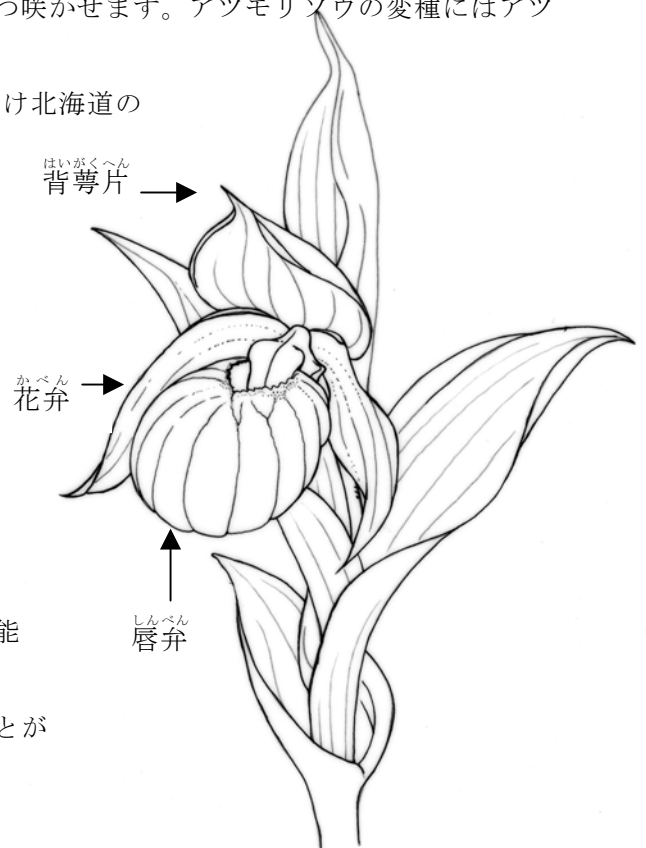
C. macranthum var. *hoteiatsumorianum* や、白い花をつけ北海道の

礼文島にしか自生していないレブンアツモリソウ

C. macranthum var. *rebunense* などがあります。

アツモリソウの種子は風によって散布されます。種子は遠くまで運ばれるように埃ほこりのように小さく軽く、米粒の 1 万分の 1 程度の重さしかありません。あまりに小さいため発芽するための養分すら持たず、糸状菌（カビの一種）を分解・吸収することで栄養を得て発芽しますが、葉を展開し光合成をおこなえるようになると菌を栄養源としなくなると考えられてきました。しかし最近、成熟した個体も栄養源の一部を菌に依存している可能性があるという研究が報告されています。

アツモリソウは本園では高山植物展示棚で見ることが出来ます。



北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/>

アツモリソウ (*Cypripedium macranthum*)

参考：原種ラン図鑑（日本放送出版協会 2003）ほか

3. ハクサンチドリ

ハクサンチドリ（白山千鳥）*Dactylorhiza aristata*はハクサンチドリ属の代表種で、草丈は10~40 cm、多数の花を密に着け、初夏に咲きます。萼片は細く長さ約1 cmで、花弁は萼片よりやや短く、前方へ伸びており、唇弁は扇形で先が三つに分かれます。花色は紅紫色のものがふつうですが桃色から白色まで多彩で、特に白色の花を付ける種類をシロバナハクサンチドリと呼びます。また、葉も幅の広いものから狭いものまで変異に富み、中でも葉に紅紫色の斑紋の入る種類はウズラバハクサンチドリと呼ばれます。

名称は、花の形が鳥の「チドリ」に似ており、石川県白山産のものが最初に報告されたことに由来しています。その昔、比較的簡単に高山植物を見ることができる山といえは修験者の修行のための登山道があった白山などに限られていたことも関係しているのかもしれませんが。

ハクサンチドリは朝鮮半島、オホーツク沿岸、カムチャッカ半島、アラスカなどに分布し、日本では北海道および本州の中部以北の亜高山、高山帯の草地に主に自生しています。しかし、時として湿原や、路肩のり面などの草地に生育している場合もあり非常に広い地域や環境条件に適応しています。これはハクサンチドリの花色や葉に変異が豊富であることと関連があるという説もあります。すなわちハクサンチドリは遺伝的にきわめて多様であり、そのことが形態変異の豊富さの原因であると同時に、さまざまな地域・環境条件に対する幅広い適応性を生み出しているという考え方です。

このように気に入った環境では辺り一面に花を咲かせるハクサンチドリですが、その一方で栽培すると意外に気むずかしく、日当たりが悪かったり、灌水が十分でなかったりすると徐々に衰えて数年で消えてしまうことも少なくありません。

ハクサンチドリは本園では温室前の花壇で見ることが出来ます。



ハクサンチドリ(*Dactylorhiza aristata*)

4. コアニチドリ

ヒナラン属の一種であるコアニチドリ *Amitostigma kinoshitae* は日本の本州中部以北と千島列島の南部に分布する小型の地生ランです。ヒナラン属の中ではもっとも北方まで自生する種で、初夏に咲く花は白色～紅色で直径 1 cm ほど、茎の先端に 2~5 個付きます。萼片の 1 枚と花弁とは重なるようにして兜^{かぶと}状となります。唇弁は三つに分かれ、鳥が羽を広げているような形となります。草丈は 10~20 cm、葉は長さ 4~8 cm で 1 枚のみ付けるのがふつうですが、まれに 2 枚のこともあります。根は細長く紡錘形で肥厚しています。

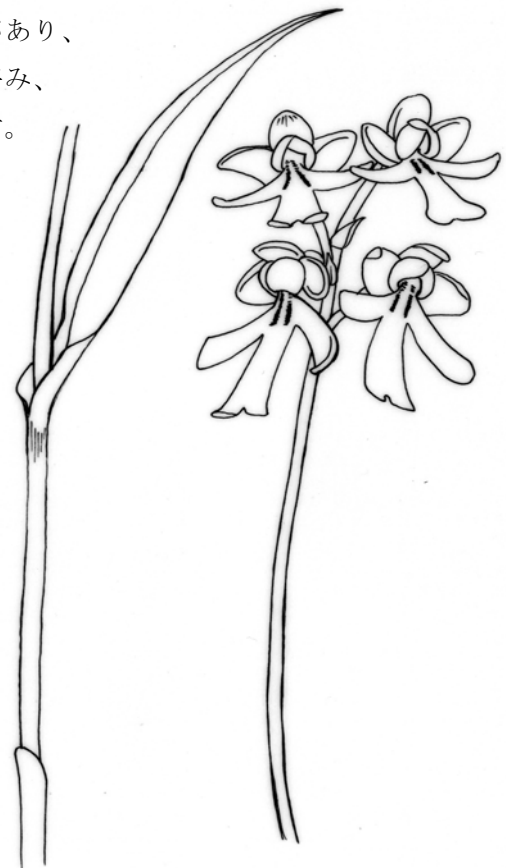
唇弁の形から「チドリ（千鳥）」と呼ばれますが、これは鳥のチドリのことではなく、家紋の一つ「千鳥紋」から連想されたとする説もあります。

コアニチドリは秋田県上小阿仁^{かみこあに}村付近で発見され、現地を流れる小阿仁川^{こあに}にちなんで「小阿仁千鳥」と命名されました。学名の *kinoshitae* は本種を発見した明治時代の山草家、木下友三郎からとったもので牧野富太郎が名付けたものです。

コアニチドリは花序の先端にムカゴを作るという特徴があり、これで増殖することも可能です。湿地や湿った岩の上を好み、ムカゴで増えるという特性のためか、時として群生します。栽培は比較的容易で、増殖もしやすいですが、水持ちの悪い用土では成長しにくく、また株の勢いを保つためには数年に一度の植え替えが必要です。

コアニチドリのように「～チドリ」の名が付くラン科植物は少なくありませんが、必ずしもコアニチドリと同じ仲間（ヒナラン属）とは限りません。ミズチドリやキノチドリはツレサギソウ属ですし、ヒナチドリやアワチドリはウチョウラン属、この「植物園だより」で以前紹介したハクサンチドリはハクサンチドリ属に分類されています。

コアニチドリは本園では高山植物展示棚で見ることが出来ます。



コアニチドリ (*Amitostigma kinoshitae*)

5. クマガイソウ

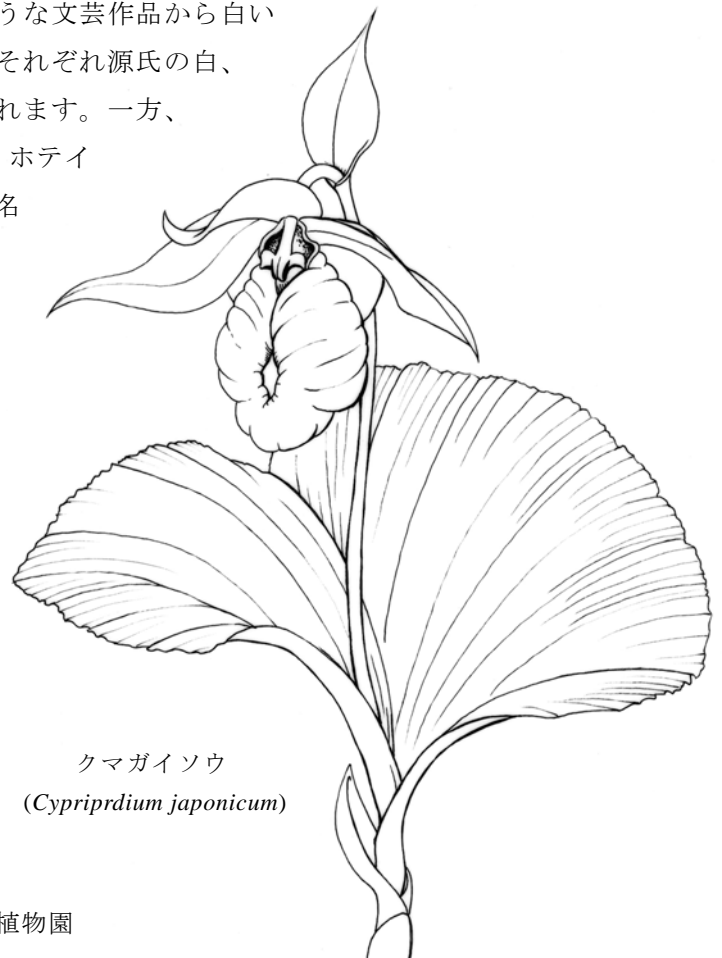
アツモリソウの仲間であるクマガイソウ *Cypripedium japonicum* は北海道から九州まで分布し、雑木林、常緑広葉樹林の林床、竹林などに群生し、時には大群落を作ります。江戸時代には当時世界有数の大都市であった江戸近郊の道灌山^{どうかんやま}（現在の荒川区西日暮里付近）や早稲田（現在の新宿区）でもふつうに見られたという記録（岩崎灌園「本草図譜」巻 39、1830 年）が残っていますが、現在ではその数は激減し、環境省による「絶滅のおそれのある種」に指定されています。

アツモリソウの仲間は長楕円形の葉を持つものがふつうですが、クマガイソウの場合は扇を開いたような形をしているのが特徴です。葉の皺^{しわ}は扇をたたんだときに出来る折り目とも良く似ています。初夏に咲く花は直径 8 cm 程、花弁は黄緑色、唇弁は皺が多く淡黄白色です。

クマガイソウ（熊谷草）の名前は源平合戦の武将、熊谷直実^{くまがいなおさね}に由来します。一ノ谷の戦いで、源氏方の武将熊谷直実^{くまがいなおさね}は平清盛の甥である平敦盛^{たいらのあつもり}を討ち取りました。相手がまだ少年といえるほど若かったことに心痛めた直実は出家を決意しました。「平家物語」で伝わるこの話から歌舞伎「一谷嫩軍記^{いちのたにふたばぐんき} 熊谷陣屋^{くまがいじんや}」が作られ、江戸時代の宝暦年間（1751～1763）に大坂、次いで江戸で上演され大評判をとりました。このような文芸作品から白い

花のクマガイソウ、赤い花のアツモリソウにそれぞれ源氏の白、平氏の赤にちなんだ名前が付けられたと思われまます。一方、クマガイソウにはオオフクロバナ（大袋花）、ホテイソウ（布袋草）などの異名があり、また地方名としてはキンタマバナ、キツネノキンタマ、フグリバナなどがあります。いずれも花の形状をきわめて即物的に言い表していることから、おそらくクマガイソウという文学的な名称が普及する以前はこのような名前と呼ばれていたのではないかと考えられます。

クマガイソウは本園では高山植物園の橋の近くで見ることが出来ます。



クマガイソウ
(*Cypripedium japonicum*)

6. ネジバナ

ネジバナ（振花）*Spiranthes sinensis*は文字通り花が螺旋状にねじれて咲くため、このような名前が付いたものです。実際には多数の小さな花が茎に巻き付くように並んでいます。ネジバナには「左巻き」という別名がありますが、花序の巻き方は左右両方ともあります。また花序がねじれずに茎の片側だけにまっすぐ付く個体もあります。一つ一つの花は直径 4~6 mm、花弁はピンク色で唇弁は白色です。一般に開花期は初夏から初秋にかけてですが、開花期の遅い「秋咲き」とよばれる種類も報告されています。

ネジバナは日本各地、中国南部、台湾からインド、マレーシア、オーストラリアの日当たりの良い草地に自生します。公園の芝生や街路樹の下、中央分離帯、河川敷などにも広く見られ、都市化の結果生じたこのような草地に適応出来たのは、元々草原に自生していたという理由のほか、特定の訪花昆虫に受粉を依存する多くのラン科植物と異なり、受粉を特定の昆虫に依存していないためであるという説もあります。花の形態も、葯と柱頭の位置が浅いためハナバチの仲間ならどのハチでも受粉可能だと考えられています。関東ではコハナバチ、東北ではマルハナバチ、沖縄ではドロバチが受粉に関わっているのではないかと言われています。さらにハチ以外の昆虫でも受粉可能だという説もあります。多種多様な昆虫による受粉が可能ということは交雑が生じ易いとも考えられ、香港島で発見されたネジバナの仲間であるホンコンネジバナはネジバナとネジバナの一種である *Spiranthes spiralis* との雑種だという研究報告があります。ネジバナについてはまだわからないことが多く、新たな研究・発見が期待される分野でもあります。

元来日本にはネジバナの生育にふさわしい草原はそう多くはなかったと思われます。ネジバナは都市化に適応した数少ないラン科植物と言えるかもしれません。

ネジバナは本園では草本分科園で見ることが出来ます。



ネジバナ

(*Spiranthes sinensis*)